

妊娠期から子育て期まで切れ目ない母子支援の学びを取り入れた母性看護学実習報告

高島葉子 柳原眞知子 佐藤初美
長岡崇徳大学 看護学部 看護学科 母性看護学

Maternal Nursing Practicum at Nagaoka University, which incorporates seamless maternal and child support learning from pregnancy to child-rearing

Yoko Takashima, Machiko Yanagihara, Hatsumi Sato

Nagaoka Sutoku University, Department of Nursing, Faculty of Nursing, Maternity nursing

【背景】2019年4月開学した長岡崇徳大学は2021年度はじめての母性看護学実習を行った。実習場確保の困難さや、臨地実習でも妊娠期から子育て期を妊産婦や家族・地域を包括的に学習することが求められていることから、産科医療施設1週間、外来・子育て支援施設・産後ケア施設・無床助産所実習を1週間実施した。

【目的】母性看護学実習の目的や目標3の達成状況を評価し、カンファレンス内容や実習記録等から学生の学びを明らかにした。

【倫理的配慮】実習評価を終了し学生に周知した後、実習記録等の使用の同意を得た。実習施設の表記はアルファベットで示した。

【評価方法】実習評価表から実習目標を把握し、実習記録、カンファレンスノートの内容を分析した。

【結果】学内実習も含む実習施設で39名の学生が実習を終了し全員が合格した。産科医療施設外を実習場とする実習目標3の「母子支援は妊娠期から産み子育て期まで継続して実践されていることを説明できる」の到達度は平均値82.2%であり、実習記録等では、妊娠期から子育て期までの切れ目ない包括的ケアの意義を十分にとらえていた。

キーワード：母性看護学実習、看護学生、妊娠期から子育て期、切れ目ない、母子支援

Keywords：Clinical Practice in Maternity Nursing, nursing student, from pregnancy to child-rearing, seamlessly, mother and child support

1. はじめに

1. 出産の場の推移と母性看護学実習が行われてきた場

我が国では、かつて、人が生まれ育つ場は地域であった。第二次世界大戦後の1950年は99%が自宅出産であり、1965年を機に自宅出産と医療機関での出産数は逆転し、2018年は99.9%が医療機関での出産数である(統計でみる日本2022)。女性・家族が出産の場として医療機関を選択するようになったのは、ひとえに出産における安全確保のためである。出産の医療化に伴い、母性看護学実習も2単位90時間が医療施設内(病棟および外来)で、周産期母子を対象に行われてきた。

2. 母性看護学実習の現状と課題

母性看護学実習の現状とその課題としては、第1に臨地実習の場が医療施設で完結してしまうために、学生にとっては妊娠・分娩・産褥・新生児期そして育児期という継続した周産期ケアであるものの、その一部分しか捉えにくくなったことである。第2に実習場の確保困難である。日本における出生数は1950年約238万人だったものが、2019年では約87万人と激減しており(厚生労働省2022)、母性看護学実習における実習場の確保が困難な要因の一つとなっている。加えて、長岡崇徳大学(以下、「本学」とする)は新設大学であり、周辺地域の病院では病院に付随したあるいは従前から近隣の看護専門学校の臨地実習を受け入れており、本学の母性看護学実習の受け入れは専門学校の実

連絡先：〒940-2135 新潟県長岡市深沢町2278番地8
E-mail: takashima-y@sutoku-u.ac.jp
TEL: 0258-46-6666 (内6609) FAX: 0258-86-6637

習がない1～2クールにとどまっている。学生数が増えた場合の実習場確保は相当に困難であると言える。

(社)日本看護学校協議会(2012)の「小児・母性看護学実習に関する実態調査」報告書によれば小児・母性看護学実習での施設確保困難と回答した教育機関は6割を超えた。同報告書では、これからの母性看護学実習のあり方として、最低1単位は病棟や外来等を中心に実習し、残りの1単位は柔軟に考えることを提案している。2012年および2015年厚生労働省医政局看護課長事務連絡において、病院以外の施設を実習施設に含めることや、臨地実習における実践活動の場以外で行う学習について具体的に示している。

3. 看護基礎教育における母性看護学および母性看護学実習が目指すもの

以上のように様々な背景の中、看護基礎教育における母性看護学の学びにおける対象は妊産褥婦とその子ども、将来子どもを産み育てる女性、および過去においてその役目を果たした女性のみならず、生涯を通じて性と生殖に関する健康を守るという母性看護の観点から女性と生殖や育児のパートナーとしての男性、子どもが生まれるあるいは乳幼児を育てる家族、その家族が生活する地域社会も含むようになった(森, 工藤, 香取他 2020)。したがって、臨地実習でも、妊娠期から子育て期を妊産褥婦や家族・地域を包括的に学習することが求められている。すなわち、新カリキュラムにある多様な場での学びを保障することにつながると言える(看護基礎教育検討会報告書 2019)。この報告書にあるような母性看護学実習の展開において、多くの関係者との協力関係も求められることとなった。

4. 実践報告の目的

本学においては、上記を踏まえ1週間1単位45時間を産科医療施設の産婦人科病棟実習、1週間1単位45時間を病棟以外(外来, 子育て施設, 産後ケア施設, 助産師同行)実習を構成

している。

母性看護学実習の初学者である学生にとっては、全てが初めての経験である。病院実習に加え家族・地域といった包括的な実習になじむのか、学びが得られるのか、教員として学びが得られるように支援できるのか不安のある中での令和3年度の臨地実習であった。

そこで、令和3年度の母性看護学実習を振り返り、母性看護学実習の目的や主として本テーマに係る目標3の達成状況を評価し、カンファレンス内容や実習記録等から学生の学びを明らかにすることを目的に、実践報告することとした。

II. 実践報告にあたっての倫理的配慮

実習記録から学生の実習での学びを整理するため、実習記録の利用について学生に目的および内容、公表について掲示とメールで説明し、返信がないことをもって承諾の意思である旨を伝え承諾を得た。この同意については実習評価を全て終え、学生に示された後に実施しており、成績には無関係である。また、個人が特定されないように留意した。実習施設に関しては固有の名称を避けてA病院や子育て支援施設Gなどの表現とした。

III. 実習目的・目標

1. 実習目的

実習目的は「周産期にある対象者とその家族を尊重し、適切な援助ができるための基礎的能力を養い、妊娠期から子産み子育て期まで切れ目のない継続したケア実践を理解する。」である。

2. 実習目標

実習目標は表1のように「1. 産褥期にある母性の特性と健康問題について理解を深め、看護過程を展開できる」「2. 母子・父子を取り巻く家族関係を把握し、家族再構築のための看護実践について説明することができる」「3. 母子支援は妊娠期から子産み子育て期まで、継続し

表1 母性看護学実習目標と評価（実習評価表を本実践報告用に改変）

評価基準 5：ほとんど助言を要せず、助言より発展的にできる 4：少しの助言でできる
3：助言すればできる 2：助言してもかなりの不足がある 1：助言してもほとんどできない

評 価 項 目	教員評価
目標1 産褥期にある母性の特性と健康問題について理解を深め、看護過程を展開できる	
目標2 母子・父子を取り巻く家族関係を把握し、家族再構築のための看護実践について説明できる	／ 30
1) 産後の全身状態のアセスメント・診断、ケアプラン、実施・評価ができる	
2) 子宮復古のアセスメント・診断、ケアプラン、実施・評価ができる	
3) 新生児のアセスメント・診断、ケアプラン、実施・評価ができる	
4) 新生児の心理（こころの発達）を理解し、適切なケアを考えることができる	
5) 進行性変化と授乳姿勢の観察ができ、正常か正常から逸脱しているか判断できる	
6) 母性（親性）形成、家族形成について観察ができ、形成が順調に進んでいるか考える	
目標3 母子支援は妊娠期から子産み子育てまで継続して実践されていることを説明できる	／ 10
1) 病院実習、子育て施設、産後ケア施設、無床助産所実習を通して母子へのケアが継続的に実践されていることを具体的に説明できる	
2) 産後に活用できる社会資源について考えられる	
目標4 妊娠分娩産褥期および早期新生児期にある母性の特性と健康問題に応じた看護実践ができる	／ 30
1) 母体のバイタルサインの測定ができる	
2) 新生児のバイタルサインの測定ができる	
3) 新生児を清潔に保つことができる（沐浴、清拭、適正な衣類・寝具）	
4) 子宮の復古の測定ができる	
5) 進行性変化の観察ができる（乳房の観察、授乳姿勢含む）	
6) 沐浴指導等を受けた褥婦の疑問を聴き応えること（スタッフへの報告など）ができる	
目標5 生命の尊厳の認識を深めると共に自らの母性・父性・親子・家庭について考えることができ、ケア提供者としての成長を図ることができる	／ 30
1) 実習を通して生命の尊厳や母性・父性・親子・家庭観に関して思考している	
2) 対象者と適切なコミュニケーションやケアができる（IC含む）	
3) カンファレンスで自分の考えをまとめ発表・意見交換できる	
4) 遅刻や欠席をしない（無断欠席は実習停止となることがある）	
5) 提出物の提出は、期限を守ることができる	
6) 連絡・報告・相談ができる	

計 100 点

総合評価	点
------	---

担当教員氏名
コメント

て実践されていることを説明することができる」「4. 妊娠分娩産褥期および早期新生児期にある母性の特性と健康問題に応じた看護実践ができる」「5. 生命の尊厳の認識を深めると

共に自らの母性・父性・親子・家族について考えることができ、ケア提供者としての成長を図ることができる」の5つとした。

IV. 実習内容

実習内容は、産婦人科病棟では周産期にある母性看護の対象者（妊産褥婦・新生児、胎児を含む）とその家族に対して、既習の知識・技術・態度を統合し、ウェルネス看護の視点で個別性のある看護過程を展開する。産婦人科外来（助産師外来、母乳外来）では妊婦健康診査・母親学級などを見学する。また、女性と家族が次世代を産み育てるために、家庭や地域における継続的な母子支援も体験する。具体的には、地域で活動する看護職の沐浴指導や新生児訪問への同行、地域の子育て支援を見学するなど、多様な場で学ぶ。とした。

V. 実習方法

1. 実習施設

1) 産科医療施設（病院・クリニック）

産科医療施設はA病院、B医療センター、C病院、D病院の4病院である。

2) 子育て支援等施設

子育て支援施設実習はE施設あるいはF施設でのどちらかで1日、産後ケア施設実習は行政運営施設Gあるいは行政委託施設Hでのどちらかで1日計画した。無床助産所での同行実習は7か所の助産所を確保して計画した。ただし、無床助産所同行実習は、顧客の同意（学生同行）が得られた時のみ実習ができ、実際に実習ができるのは、子育て支援施設か産後ケア施設の実習が予定されている日程である。無床助産所同行実習は予定を立てにくく、急に実習可能になることが多い。したがって、実習が入った場合、子育て支援施設や産後ケア施設での実習がなくなるため、予定された実習日程の24時間前までに無床助産所院長から担当教員に連絡をいれてもらい、担当教員が実習当日朝までに子育て支援施設や産後ケア施設に変更の連絡をするという方法で合意できた。

2. 2週間の実習配置および実習スケジュール（表2）

表2 2週間の実習配置および実習スケジュール（パターン1、パターン2）

パターン1

	月日	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目
	曜日	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金
A病院	学生①	病棟 オリ	病棟	病棟	病棟	病棟	学内	外来	産後	子育て	学内 まとめ
	学生②		病棟	病棟	病棟	病棟	外来	学内	子育て	産後	
B病院	学生③	病棟 オリ	病棟	病棟	病棟	病棟	学内	外来	産後	子育て	学内 まとめ
	学生④		病棟	病棟	病棟	病棟	産後	子育て	学内	外来	
	学生⑤		病棟	病棟	病棟	病棟	産後	子育て	学内	外来	

注) 子育て：子育て支援施設、産後：産後ケア施設 学内：学内実習

パターン2

	月日	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目
	曜日	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金
A病院	学生①	病棟 オリ	病棟	病棟	病棟	病棟	学内	外来	産後	子育て	学内 まとめ
	学生②		病棟	病棟	病棟	病棟	産後	子育て	学内	外来	
	学生③		病棟	病棟	病棟	病棟	学内	外来	子育て	産後	
	学生④	病棟 オリ	学内	外来	産後	子育て	病棟	病棟	病棟	病棟	学内 まとめ
	学生⑤		学内	外来	子育て	産後	病棟	病棟	病棟	病棟	

注) パターン1、2とも無床助産所同行実習は助産所院長から連絡があった場合のみ実施できるもので、産後ケア施設か子育て支援施設実習中に実施する。子育て支援施設、産後ケア施設には当日朝までに実習変更があったことを連絡する。

学生の実習配置および実習スケジュールは表2のように2つのパターンに大別できる。パターン1は2つの病院に5名の学生が分かれて配置される場合で、1週目に1週間の病棟実習を行い、2週目は病棟以外（外来・子育て支援施設・産後ケア施設）での実習を行う方法である。パターン2は1つの病院に5名の学生が配置される場合で、1週目3名の学生が病棟実習、2週目に病棟以外の実習を行い、1週目2名の学生が病棟以外の実習、2週目に病棟実習を行う方法である。実習初日は病院ごとに配置された全員が病棟オリエンテーションを受けることとした。

3. 実習時間

実習時間は、8時30分～16時とした。

VI. 結果

1. 実習の実際

1) 産科医療施設（病院）実習

A病院では5グループ、B病院では2グループ、C病院では1グループが実習できた。新型コロナウイルス感染症が拡大した時期は病院の実習受け入れは難しく、学内実習を行ったのは3グループであった。

2) 子育て支援施設・産後ケア施設・無床助産所同行実習

N市子育て支援施設Eでは23人、Fでは12人、N市行政運営産後ケア施設Gでは14人、行政委託施設Hでは22人、開業助産師同行訪問実習では6名の学生が実習できた。

2. 学生の学び

1) 実習目標の達成状況

本学における母性看護学実習の目標は表1のように5つであり、目標1・2に対して6つ、目標3に対して2つ、目標4に対して6つ、目標5に対して6つの下位目標を設定した。

学習目標の達成状況を今回の実践報告に照らし合わせ、子育て施設や産後ケア施設、無床助産所同行実習を主な実習の場とする実習目標3の「母子支援は妊娠期から子産み子育て期まで継続して実践されていることを説明できる」でみてみた。表3のように平均値82.2%、最高値100%、最低値70%であった。また、実習目標3の下位目標である「病院実習、子育て施設・産後ケア施設・無床助産所実習を通して母子へのケアが継続的に実践されていることを具体的に説明できる」の評点の平均値は5点満点中4.2、「産後に活用できる社会資源について

表3 実習目標の到達度

目標	n=39		
	平均値	最高値	最低値
1. 産褥期にある母性の特性と健康問題について理解を深め、看護過程を展開できる。	74.1%	86.7%	60.0%
2. 母子・父子を取り巻く家族関係を把握し、家族再構築のための看護実践について説明できる。(30点)			
3. 母子支援は妊娠期から子産み子育て期まで継続して実践されていることを説明できる。(10点)	82.2%	100%	70.0%
4. 妊娠分娩産褥期及び早期新生児期にある母性の特性と健康問題に応じた看護実践ができる。(30点)	79.1%	93.3%	63.3%
5. 生命の尊厳の認識を深めると共に自らの母性・父性・親子・家庭について考えることができ、ケア提供者としての成長を図ることができる。(30点)	85.6%	100%	70.0%

注) 平均値、最高値、最低値は各目標の配点を母数として百分率で算出した。

考えられる」は5点満点中4.0であった。一方、病院施設での実習目標である目標1の「産褥期にある母性の特性と健康問題について理解を深め、看護過程を展開できる」・目標2の「母子・父子を取り巻く家族関係を把握し、家族再構築のための看護実践について説明できる」は、平均値74.1%、最高値86.7%、最低値60%、であり目標3に比してやや低い目標到達度であった。

2) 産科医療施設（病院）における技術経験

学内実習となった10名を除いた産科医療施設における技術経験は表4の通りである。新生児バイタルサイン測定、沐浴実施、退行性変化・進行性変化の観察、は母性看護学実習で実施しておきたい技術内容であり、85%以上の実施率であった。

3) 最終カンファレンスの学び

この最終カンファレンスは全実習を通して8回実施した。2週間の実習最終日に学内で行われ、1部は産後ケア施設や子育て支援施設、無床助産所同行実習での学び、2部は産科医療施設（病院）での看護過程実習での学びとして分けて発表・ディスカッションした。

1部の産後ケア施設や子育て支援施設、無床助産所同行実習での学びについて、カンファレンスノートに記載された具体的な文言について類似のものを分類整理し＜ ＞で表した。

(1) N市産後ケア施設

N市の子育て支援冊子「子育てガイド」によれば、産後ケア施設は児の体重の増えやミルクが足りているか心配、母親の産後の体や心のケアを希望する場合に助産師・保健師・栄養士・母子保健推進員等が寄り添いサポートする施設である。

具体的な文言は66であり、内容の類似性で

整理し11に分類された。

学生は最終カンファレンスで＜親としての自立を支える＞＜母親が休める＞＜母親が情報共有・交流・気分転換できる＞＜おもちゃで遊べる＞＜子どもの成長が確認できる＞＜専門職の対応で安心できる＞＜家と同じように安心できる＞＜上の子がいる母親も支援を受けている＞＜さらに地域での育児につなげてもらえる＞＜家族のサポート不足や不満足感を言える＞＜母親のニーズに合わせた運営がなされている＞と、施設の場としての機能や母親がどのような状態にいるかという表現で語っていた。

(2) N市子育て支援施設

N市の子育て支援冊子「子育てガイド」によれば、子育て施設は保育士や子育てコンシェルジュがいる子育て支援拠点施設で、単なる遊び場ではなく、保育、交流、相談、情報提供機能を有した施設であり、子育て世代だけでなく、世代、分野、文化を越えた人々が集い、交流できる場である。

具体的な文言は62であり、内容の類似性で整理し11に分類された。

学生は＜地域での育児が継続できる＞＜母親同士が交流できる＞＜孤独な育児を不安に思い訪れる＞＜保育士・子育てコンシェルジュがママ同士を繋げている＞＜子どもを安心・安全に遊ばせられる＞＜母親がリフレッシュできる＞＜相談で安心できる＞＜子どもの成長が確認できる＞＜子育てのストレスが軽減する＞＜育児しながら父親として成長できる＞＜家族も利用できる＞と、ガイドにある施設の特徴を認識し、語っていた。

(3) 無床助産所同行訪問

無床助産所同行訪問実習は、学生が開業助産師の顧客である母親・家族に沐浴実施や母乳育

表4 産科医療施設（病院）における技術経験度

n=29

項目	分娩見学	新生児 VS	沐浴実施	退行性変化	進行性変化
学生人数	7名(24%)	29名(100%)	26名(89.6%)	29名(100%)	27名(93.1%)

注) n=29は学内実習者10名を除いた総数である

児支援などを提供することを契約している自宅あるいは実家への訪問に同行する実習である。

具体的な文言は14であり、内容の類似性で整理し5に分類された。

同行訪問できた学生は6名と少なかったが、
 <夫や家族との親密な関係性構築がなされている>
 <家族にとって実施可能なケアが提案されている>
 <産褥早期の(体調の変化)安心・安全のために無床助産所は大切である>
 <褥婦への具体的・肯定的ケアが提供されている>
 <普段の生活での育児の実際が理解できた>と、実際の自宅あるいは実家での生活を直接目の当たりにした中での理解・学びがあった。

(4) 産後ケア施設・子育て支援施設・無床助産所実習に共通していた学び

産後ケア施設・子育て支援施設・無床助産所実習に共通していた学びをまとめた。具体的な文言は28であり、内容の類似性で整理し8に分類された。

学生は、病棟における褥婦のケアを通して<病院での褥婦の生活はタイトだと感じる>経験をしており、育児は大変なことが多く、そのことに対する支援が必要と考えていたが、<育児は大変もあるが幸せにあふれている>と気づいていた。また、2人目の育児は慣れているから大変だという認識は持っていなかったが、<2人目だからこそその問題がある>、だからこそ、<子どもの交流を通して母も交流しリフレッシュできる>・<母親が安心・休憩・情報収集できる環境づくりがなされている>場があり、施設では専門職による<アドバイスは月齢・個別に対応している><選択肢を提示するが母親が意思決定する>といった対象主体の支援の積み重ねにより、<利用者とスタッフは信頼関係がある>と学び・気づいたと述べていた。

4) 実習記録

(1) 子育て期実習記録

子育て支援施設や産後ケア施設、無床助産所同行訪問実習では、各実習施設の場としての機能の学びのほかに1人の母親や父親とかかわり

を持つように促しており、子育て期実習記録を提出させている。記録内容は、1つは基礎情報として、出産時年齢、初産・経産、出産時の妊娠週数、分娩形式(経膈分娩・器械分娩・帝王切開の有無)である。2つは、記録の視点として①今までの経過は順調か、②本日の母子の健康状態の結果、③育児についての現在の気持ち、④家族・住居・地域などの生活環境、⑤日常の過ごし方、⑥分娩や育児の準備状態、⑦本日の結果を踏まえた母子に必要な看護、についての記載を促している。この視点で記録させることの意図は、病院外の施設で実習する場合、施設の場としての機能に目が行きがちになるため、実習目的にある母子への継続的なケアという視点を保ちたいためであった。

学生は、全員が上記の基礎情報と記録の視点に沿って記録を提出しており、母親たちが出産から現在に至るプロセスに注目した内容となっていた。

(2) 母性看護学実習最終レポート

最終レポートとして、実習目標5のうち、1つを選択して記録・提出させている。そのレポートを読み、39名の学生のうち、どの位の学生が目標3についてレポートしているか、そしてその内容を評価した。

表5のように、実習目標3「母子支援は妊娠期から子産み子育て期まで、継続して実践されていることを説明することができる」を23名(59.0%)の学生が選択しており、関心の高さが伺える。実習記録の内容は妊娠期(病院外来)に続く産褥期(病院病棟)そして子育て支援施設・産後ケア施設(子育て期)実習での具体的な学びを学生全員が記載していた。具体的な学生の学びとして表6のような記載があった。対象はそれぞれ異なっているものの、継続的・包括的なケアの必要性を学んでいた。

3. 実習場からの意見

子育て支援施設や産後ケア施設の担当者からは、「対象と積極的によく関わっており、真摯に学んでいた。」「学生さんに話すことで救われ

表5 学生が最終レポートで選択した実習目標

n=39

目標	学生数 (名)	%
1. 産褥期にある母性の特性と健康問題について理解を深め、看護過程を展開できる。	6	15.4
2. 母子・父子を取り巻く家族関係を把握し、家族再構築のための看護実践について説明できる。		
3. 母子支援は妊娠期から子産み子育て期まで継続して実践されていることを説明できる。	23	59.0
4. 妊娠分娩産褥期及び早期新生児期にある母性の特性と健康問題に応じた看護実践ができる。	8	20.5
5. 生命の尊厳の認識を深めると共に自らの母性・父性・親子・家庭について考えることができ、ケア提供者としての成長を図ることができる。	2	5.1

表6 最終レポートからの継続的・包括的ケア・多職種連携に関する気づき (抜粋)

n=23 (類似の主旨のものは省略)

- ・妊娠期から子産み子育て期までの切れ目ない継続した看護について、座学と照らし合わせながら理解を深めることができた。病院や施設等が情報を交換し、次へと繋げていくことの大切さに加え、子産み子育て期にある方々がSOSを出せる社会的な仕組みが重要である。
- ・病院は産後1週間も経たずに退院となり、今後の育児を前向きにとらえ退院する母親がいる一方で、多くの不安があるまま退院し、育児に行き詰ってしまう母親があることを忘れてはならない。産後ケア施設は産後すぐにも相談できる場であり、また母親が安心して休める体制も完備されている。退院後なかなかうまく育児ができない方や、外に出かけることができない方にサポートを行い、子育て支援施設などの社会へ馴染める間の橋渡しであり、心の抛り所であると知ることができた。産後ケア施設を卒業することができたら子育て支援施設へ、というように病院退院後から社会に馴染めるまでの継続された子育て支援が整っていると学ぶことができた。
- ・それぞれの時期に応じたサポートがあることで、子どもだけでなく母親の健康を守り、より良い生活を支えている。
- ・子育て期は児の発達に応じて、悩みが変化したり、家族との関係構築に問題が起きたりと、母親たちは多くの問題を抱えている。その解決のためには、退院を見据えて保健指導を実施すること、子育て施設の利用によって、子育て期における悩みの解消を行っていると感じた。
- ・継続した支援で母子を支え、育児を一人で抱え込まない状況を作ることが大切であると感じた。このように継続した支援を行うことで、孤立せず安心して育児を行えるため育児を少しでも楽しめるのではないかと感じた。困っている人は自分から助けを求めることが難しい。入退院時の状況や経過を各機関で情報共有し、産後ケア施設などの場を紹介・利用を勧めることも重要である。今後も安心して子育てを行うためには何が必要なかを考え、関わり方や社会資源についての学びをより深めていきたい。
- ・最近の育児として母親だけでなく父親も参加する傾向が見られている。子育ての駅に両親と子どもが来ておられ、その時、父子だけで来ている人を見て、自分も父子だけで来られるかもとお互いに刺激し合うことが父の育児参加率をあげる要因の一つになっていると感じた。情報共有の対象者は母子だけでなく父や祖父母にも広げていく必要があると感じた。
- ・妊娠期から子育て期までに様々な思いを抱えている母親やその子どもを孤立させないために切れ目ない支援を病院から地域に戻った後も行うことが重要であると学び、そのために多職種で連携し、常に先を見据えた関わりを行っていると感じた。

ている人もいた。」「私たち自身、学生さんから刺激をもらった。」などの評価を受けた。

V. 考察

1. 母性看護学実習の目的や目標を達成できたのか

実習目標の到達状況(評価表)、最終カンファレンスのまとめ、子育て期実習記録、母性看護学実習最終レポートからみると、実習目的である「周産期にある対象者とその家族を尊重し、適切な援助ができるための基礎的能力を養い、妊娠期から子産み子育て期まで切れ目のない継続したケア実践を理解する」および実習目標3「母子支援は妊娠期から子産み子育て期まで、継続して実践されていることを説明することができる」は十分達成できたと言える。特に、母性看護学実習最終レポートに実習目標3を取り上げた学生が約6割であったことは、関心の高さのあらわれであり、学びの内容がそのレポートにも適切に記述されていた。

徳留、菊地、濱松他(2021)は分娩施設と地域の多様な場で母性看護学実習を展開する中で学生の学びは【妊娠期から子育て期の母子の経過】【妊娠期から子育て期の母親の思いを実感】【退院後の生活を見据えた継続的支援の実際と連携の必要性】【母子を看る視点の広がり】【病院・地域実習を通して得られた充実感】【実習方法による学びの違い】の6つであったと述べている。本学学生の学びは【妊娠期から子育て期の母子の経過】【妊娠期から子育て期の母親の思いを実感】【退院後の生活を見据えた継続的支援の実際と連携の必要性】【母子を看る視点の広がり】については、最終カンファレンスの学びの内容や最終レポート例のように「「妊娠期から子産み子育て期までの切れ目のない継続した看護について、座学と照らし合わせながら理解を深めることができた。」「妊娠期から子育て期までに様々な思いを抱えている母子を孤立させないために切れ目のない支援を病院から地域に戻った後も行うこと、そのためには多職種で

連携すること、先を見据えた関わりを行うことを学んだ。」など妊娠期から子育て期までの母親の思いに触れ、ケアは切れ目なく継続していること、つながっていること、そして多職種との連携で成り立っていると気づいていた。このように、実践報告の目的である病院実習に加え家族・地域といった包括的な実習になじむのか、学びが得られるのかという点については、十分達成できていた。しかし、【病院・地域実習を通して得られた充実感】【実習方法による学びの違い】に類似した文言はなかった。授業評価では、学びの困難さや負担の大きさを感じていたかどうかは評価できなかった。今後は実習に対する充実感や負担感は学習のモチベーションに影響するため、把握する必要がある。

山口、澤田(2019)は子育て支援センター実習後に母性看護学実習を行った際に子育て支援センターで得たことがほとんど生かされなかった反省を踏まえ、周産期ケアの展開では退院後の母子および家族へのケアとして子育て支援センターでの学びを取り入れられるような助言、指導が必要だと述べている。また、子育て支援センターで生かされなかった理由として、2週間の母性看護学実習は劇的な母子の変化にただついていくのが精一杯であったと想像できるとしている。本学では、母性看護学実習(周産期実習)2週間の中に産科医療施設病棟での看護過程実習1週間と子育て支援施設・産後ケア施設・無床助産所実習を1週間組み入れており、周産期ケアとのつながりは十分学べる組み立てとなっている。病棟1週間の看護過程実習を効果的に行うために3年前期の母性看護援助論Ⅱでは、模擬事例を現実にあるような事例を使いショート事例の看護過程展開の後、全体事例を展開させて学びを深められるように工夫している。

唐田、大賀、畑野(2016)の研究では、地域の子育て支援実習は学生の長期的な視点をもたらす一助とはなるが、親の発達過程を示す学びは低かったことが報告されている。しかし、

本学学生は実習態度や記録、カンファレンスの発言から、両親が出産・育児を通して大変さだけでなく子どもの成長を日々喜び、子どもへの愛情を培い、母親・父親として成長する姿を感じ・学んでいた。このように切れ目ない・包括的支援の学習成果をあげるには、産科医療施設と子育て支援施設・産後ケア施設・無床助産所実習をセットで行えばできるというものでもない。実習が効果的に行われた理由は、大学と実習施設との詳細な打ち合わせにより、実習施設から実習意図をくみ取り適切にご指導いただいたこと、学生への事前オリエンテーションにより実習の目的・内容などを十分に理解して臨ませることができたことがあげられる。すなわち、実習施設と大学そして学生が目的・目標に向かって共に努力することによって成し遂げられた実習であった。

2. 妊娠期から子育て期まで切れ目ない母子支援の学びを取り入れた母性看護学実習の意義

妊娠期から子育て期まで切れ目ない母子支援の学びを取り入れた本学の母性看護学実習は、産科医療施設以外での実習でも学生の学びの効果が大きく、場の違いによる様々な看護方法や母子を取り巻く現状や課題を妊娠期から子産み子育てまで継続・包括的にとらえていくことが明らかになった(壹岐, 長鶴, 大野他 2021)。このように新カリキュラムにある多様な場での学びを保障する(看護基礎教育検討会報告書 2019)ためには、多くの関係者との協力関係も求められることとなった。このことは、母子・家族との直接的なかわりやそこに関わる多くの専門職とのかかわりも学生を成長させており、意義がある。

少子化、実習施設を持たない教育機関の増加、新型コロナウイルス感染症対応を考えると、周産期実習1週間と子育て支援施設・産後ケア施設などの包括的に学ぶ場での実習は益々拡大していくものと思われる。清水, 川村(2022)は産科医療施設以外で展開されている母性看護学実習の教育方法に関する文献検討

を行っている。医中誌 Web で検出された文献数は11件で、実習の場として子育て支援施設、乳児院、保健センター、男女共同参画推進センター、学内で行われていることを明らかにしている。また、1か所単独で行われておらず、本学のように産科医療施設での周産期看護実習をセットにして科目を構成していた。本学では、無床助産所の同行訪問を取り入れているが、先行文献(清水, 川村 2022)ではそうした母性看護学実習を展開しているところはなかった。この無床助産所の同行訪問実習は、産褥入院後の継続ケアを理解させるには、重要な実習と考えられる。しかし、無床助産所の実習は沐浴等の依頼は突然に入ってくるため、予定していた子育て支援施設や産後ケア施設の実習をキャンセルすることもあり、関係機関の理解が不可欠である。無床助産所同行実習は令和3年度は6件に留まっているが、関係機関の理解を得ながら継続発展させていきたい。

3. 切れ目ない母子支援の学びを取り入れた本学の母性看護学実習の課題

切れ目ない母子支援の学びを取り入れた本学の母性看護学実習の学びは、実際に母子・家族と接して体験したことや指導者からの助言によって経験化されていた。しかし、従来母性看護学実習は2週間の周産期看護実習で産科医療施設の病棟・外来で妊娠期、分娩期、産褥期・新生児期を学んでいたことから、懸念されるのは国家試験に対応できる知識が得られるかどうかである。現在の国家試験問題(母性)はいまだ産科医療施設での学びを踏襲した問題になっているように思われる。本学の母性看護学の1週間の病棟実習では、タイミング良く5日間同一母子を継続して受け持てる保障はなく、分娩に立ち会えることはまれであり、学生の周産期ケアの学びとして不十分さを否定できない。中田, 大槻(2014)は母性看護学実習における看護技術の経験の分析から、退行性変化である子宮底の測定や悪露の観察、進行性変化である乳頭・乳房の観察の経験率の高いことが看護師国

家試験に対応した実習内容の経験であったと述べている。本学では退行性変化100%、進行性変化93.1%の技術経験をしている。このことは産科医療施設での学びが1週間という短い期間であっても、十分な学びができていとも言える。

産科医療施設実習での1週間の看護過程実習を効果的に行うためには、事前学習も含めて看護過程の展開の中で観察・ケアの機会を臨床の理解を得て極力体験させること、カンファレンスを通して学生同士情報共有させることを通して知識を定着させていく必要がある。教員も適宜、知識を確認しフィードバックできるように関わるのが重要である。

謝辞

実習においてご協力いただいた実習施設の皆様、実習記録の利用を快く受けてくれた学生の皆様に心より感謝申し上げます。

尚、本実践報告における利益相反はありません。

文献

- 壹岐さより, 長鶴美佐子, 大野理恵, 長友舞 (2021). 地域で開催される育児教室を活用した母性看護学実習の教育的効果—退院後の母子の生活の捉え方に焦点をあてて—. 宮崎県立看護大学研究紀要 21. 1, 25-34.
- 唐田順子, 大賀明子, 畑野花奈 (2016). 地域子育て支援施設実習を組み入れた母性看護学実習の教育プログラムの効果・学生の長期的な視点を育むための試み. 日本母性衛生学会誌. 56 (4)
- 厚生労働省 (入手日: 2022. 4. 12). 出生数, 合計特殊出生率の推移. <https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/I9/backdata/01-01-01-07.htm>
- 厚生労働省 (入手日: 2022. 5. 22). (2017) 子育て世代包括支援センター業務ガイドライン. <https://www.mhlw.go.jp/file/>

06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/kosodatesedaigaidorain.pdfnnnn

厚生労働省医政局看護課長事務連絡 (入手日: 2022. 5. 22). (2015) 母性看護学実習及び小児看護学実習における臨地実習について.

<https://www.mhlw.go.jp/content/000642612.pdf>

厚生労働省医政局看護課長事務連絡 (入手日: 2022. 5. 22). (2012) 臨地実習における実践活動の場以外で行う学習について.

<https://www.mhlw.go.jp/content/000642612.pdf>

森恵美, 工藤美子, 香取洋子, 堤治 他 (2020). 系統看護学講座専門分野Ⅱ母性看護学各論. 医学書院. はしがき. 東京.

中田久美, 大槻優子 (2014). 母性看護学実習における学生の技術経験状況調査. 医療保健学研究. 5, 129-139.

(社) 日本看護学校協議会 (入手日: 2022. 4. 12). (2012) の「小児・母性看護学実習に関する実態調査」.

http://www.nihonkango.org/pdf/act_28th_koukan_5.pdf

清水美樹, 川村千恵子 (2022). 産科医療施設以外で展開される母性看護学実習の教育方法に関する文献検討. 甲南女子大学研究紀要Ⅱ. 16, 53-62.

統計でみる日本 (入手日: 2022. 4. 12). 人口動態調査 出生の場所. <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&query=分娩場所>

徳留静代, 菊地美帆, 濱松加寸子, 井指真由子 (2021). 分娩施設と地域の多様な場を連動させた母性看護学実習の効果. 常葉大学健康科学部研究報告集. 8 巻第1号, 9-17.

山口さつき, 澤田みどり (2019). 子育て支援センター実習を取り入れた母性看護学実習の検討. 旭川大学保健福祉学部紀要.

11, 15-21.